

豊かな心を育て、子どもを伸ばす教育相談 —別室登校生徒への支援の視点から—

所属校：葛飾区立中川中学校
氏名：安藤恵美
派遣先：早稲田大学教職大学院

キーワード：別室登校生徒支援・コラージュ

I 研究の目的

今日の学校が抱える課題として不登校生徒の増加が挙げられる。そのため、不登校の予防や再登校支援にとって別室登校は重要な役割を果たす。

そこで、別室登校状態の生徒を理解し、有効な支援方法を教師の視点から考えることを目的とする。

II 研究の方法

A中学校の別室登校生徒の支援に携わり、そのかわりごとと生徒の変容を考察することを通し、有効な支援方法を探る。具体的には、別室登校の複数の生徒がともに活動する場に参画し、個々の生徒の支援に当たる。そこで、生徒Aとのかかわりを検討するとともに、小集団で行うコラージュの活動について考察する。

III 研究の結果

1 別室登校生徒Aへの支援を通して

生徒Aの変化を「枠」というキーワードで見えていく。ここで言う「枠」とは、生活をしていく上での物理的な居場所と定義する。

(1) 枠の喪失

中学校入学後、中学校という新しい枠の中で生活していた。学年や学級という大きな枠の中にさらに仲の良い友人関係という小さな枠があり、その小さな枠は狭く、自由に動ける度合いは少ないが、その狭さや親密さが安心感をもたらしていた。しかし友人間でのトラブルが発生し、それにより今まで居心地がよく、安定した友人関係という安心感をもたらしていた枠が崩壊した。この小さな枠が崩壊し、Aは一気に学級・学年という大きな枠に投げ出された。この「枠」の喪失は、マズローの欲求段階説の「所属と愛の欲求」「承認の欲求」の喪失と同じである。今までは自分を受け入れてくれる枠があり、その枠の中で過ごすことによって、他人に受け入れられているという信頼感をもつことができていた。しかし、この小さな枠を失ったことにより不信感が信頼感を上回り、つながりの薄い広だけの場という危険で恐怖を感じる世界に投げ出さ

れてしまったのである。ここから、安心感や承認感を取り戻すためのAの日々が始まった。

(2) 安心できる場への退去～そこでのエネルギーの充電

A本人はつながりの薄い広だけの場ではどうしていいのか分からないため、別室という小さく、限られた枠を求めようになった。保護者も学校も以前のようにAが安心でき、信頼できる枠を作ってあげたいと思い、本人や保護者と相談の上、学校と同じ機能をもつ(=学習ができる)通級学級に週1回、その他の日は別室登校することとなった。

別室登校初日、前日に通級学級に行っていないことが判明した。通級学級に行ったら、別室にも来られるというルールが破られたのである。Aとしては「ルールを破ったのは自分が悪いが、本音としては通級学級には行きたくない」という。なぜ、行きたくないのか？通級学級という枠は知り合いがいないので、気を使うことはないが、何時に行ってもいい、何時に帰ってもいい、決まったクラスはない、学習はプリント主体で各自が各自のペースで課題に取り組むという自由な枠である。すなわち通級学級は自分が入れない学年学級と同じ性質をもった枠だったからである。安心感や承認感を取り戻すAにとってこの通級学級は自分があるがままに受け入れ、安心感を与えてくれる枠ではなかった。A自身もそこは自分が求めている枠とは違っていると感じていた。A自身が行きたくない理由をうまく語れてはいないが、事前に見学に行ったときから、通いたい場所ではなく、初日に行かなかったことがAなりの抵抗であったように感じられる。

この時期、筆者はAに対し、学習に関しても、その他の活動に関してもAがしたいことだけを行わせ、Aが何かを始めたら、そのことを一緒に行うという支援を行った。Aのペースを守ってあげることと、常にAの行動を見守り、Aのペースを守ってあげることとで安心感や信頼感の回復を試みた。

(3) 自分に合った枠に挑戦する時期

2学期に入り、給食を食べてから下校するようにな

った。この変化は、1Fの相談室から2Fの会議室への移動を意味していた。さらにクラスの生徒2名が給食を持ってくるため、その子たちと顔を合わせる体験も経る。さらに、筆者と一緒に誰もいない教室にプリントを取りに行くというさらにもう一段階踏み込むことができた。同じ別室の仲間が教室で授業を受けられたということに刺激を受けたのかもしれないが、同じように授業を受けるという何段階も飛び越したその場しのぎの、できない課題を自分に課すのではなく、今の自分にできること、できないことを自覚し、それを主張できるようになった。すなわち、自分で次に乗り越えるべき課題を決めることができるようになったのである。

この時期のAは別室登校にも慣れ、別室という枠の中では、何の危険や恐怖も感じることなく過ごしていた。Aに対する支援としては、引き続きAに寄り添うことと、Aがこうしたいと自分の意思を表明したことに対しては否定をせずに、受け入れていった。その別室で過ごす日々の中で、周りに合わせることなく自分の意思を伝えることや、失敗を恐れず自分で次の課題を設定し、挑戦していくことができるようになった。

(4) 母への依存を経て

2学期中盤からは午前中に下校するという日々に移行していた。午前中に帰るたがるのは、母親が家にいるからということだった。一見後退に見えるが、そうではないように感じる。学校に行っていることで家での親子関係も良好で、母へ依存することで安心感や信頼感を獲得していった、それゆえにみんなと同じ行動をとらない決断すらできたと考えられる。

2 自由な自己表現を促すために

別室登校生徒には専用の時間割が設定されており、それに沿って個人のペースで学習をしている。Aだけでなく、個々の生徒がもっと自由に自己を表現できる時間があるといいと感じた。今、どんな思いなのか、何を感じているのか、言葉や表情でうまく表せない子や遠慮がちにしか表現できない子もいるので、教科学習から離れた自由な活動の中で自分を表現してもらおうとコラージュを試みた。以下、Aの経過を追う。

<第1回目>

真っ白な画用紙を目の前にして、作業が進まなかった。これは急に広い枠の中に放り出された状況や通級の状況に似ている。そういう状況下では、「やりたくない」と逃げるしかないのである。

<第2回目>

1回目の続き。出来上がった作品は圧倒的に白い部

分が多かった。これは、画用紙という枠は広すぎる、決められた枠を余すところなく使うのではなく、自分が使える大きさだけを使い、自分のペースで進みたいという意味を表していたように感じられる。

<第3回目>

2作品目の制作。空白は前回同様多いが、自分を中心に据え、目についたものを貼っていくのではなく、何をどこに貼りたいかを考えながら貼るようになってきていた。四隅に貼ったものは、自分を支えているものにとらえることができるかもしれない。

1作品目と2作品目をみると、Aの相談室での枠の再構築過程と似ている。初めは周りに合わせて給食を食べたり、仲間の様子を気にしたりしつつも私はどうしよう？と数ある選択肢を眺めている状況だったが、その中から、できることと、できないこと、したいことと、したくないことを選別し、私はこれをする、というものを見つけ、主張できるようになった。

IV 考察

これまで、Aの変化を述べたが、他の別室登校生徒の様子を見ていても、まずはその子をそのまま受け入れるということが初めの一歩として大事なのではないかと感じる。また、Aの場合には、失われてしまった安心感や信頼感を回復していくために別室における支援を中心としたが、その子の今を知り、何がその子のつまずきになっているのか、どんなエネルギーを回復してあげればよいのかをつかみ、個々の成長に合わせて別室登校や通級学級など適切な環境を整えてあげることも重要であると思う。別室登校をしている子供たちは自分の今を表現できない、したくない、また表現したくてもその方法がわからない場合も多い。そういう子供たちには通常の教室のように直接的な指導ではなく、その子が自分を安心して表現できる環境を整え、時間がかかってもそれを待つという援助が最適なこともある。そのため、教師は普段教室ではこうあるべきというルールの中での指導だが、別室では個々の生徒のペースに合わせた支援を行い、教師側が引っ張っていくという構図ではなく、生徒の後について必要な時に後ろから支えるという視点での援助を続けていくことにより、安心感や信頼感を回復できると生徒自らが次の課題にチャレンジする成長過程があることを学んだ。

【参考文献】

A. Hマズロー 1983 小口忠彦監訳「人間性の心理学」産業能率大学出版部